

## 対照レトリックの可能性

久 野 誠

### Essay on Contrastive Rhetoric

Makoto Hisano

#### Abstract

Modern arrangement of classic rhetoric has been made through Professor Sato's writing. However, we cannot think that the rhetoric of English is completely the same as that of Japanese. For example, *Alliteration* or *Zeugma* cannot be translated into other languages. Moreover, Japanese has many signs of a *Simile*, etc. In this way, we will grope for the possibility of Contrastive Rhetoric between English, French and Japanese.

#### Key words

Anadiplosis, Antithesis, Antanaclassis, Antonomasia, Chiasmus, Contrastive Rhetoric, English, French, Hypallage, Hyperbole, Japanese, Litotes, Metapher, Metonymy, Simile, Kenning, Oxymoron, Personnification, Prétérition, Syllepsis, Synechdoche, Transferred Epithet, Zeugma

Received Sept. 29. 2004

ふたつ以上の言語を比較検討する学問的な立場には、次の4種がある。

1. 比較言語学 2. 古典的言語類型論 3. 近代的言語類型論 4. 対照言語学<sup>(1)</sup>

比較言語学は、歴史言語学の一種で、ドイツで少壮文法学派を中心として19世紀に隆盛をきわめた。しかし、20世紀になって、ソシュールの言語理論の台頭とともに、それは影をひそめた<sup>(2)</sup>。比較言語学は系統を等しくする諸言語の文法的な比較を行うことによって、前文献時代の言語状態(祖語)がどんなものであったかを考古学のように想定したりする学問領域である。比較言語学はしだいに過去のものとなりつつあるが、ドイツ流の実証主義も手伝って、その学問的な緻密さは今でも魅力となっている。言語類型論は世界の諸言語をいくつかの類型に分類しようとするものであり、古典的な類型論と近代的な類型論とがある。古典的な類型論とは、19世紀にフンボルトらによって提唱された言語理論を指し、その基本類型には次の3種がある<sup>(3)</sup>。1. 屈折言語 2. 膠着言語 3. 孤立言語 たとえば、英語は1.で、日本語は2.で、中国語は3.に属するとされる。屈折言語とは、名詞の格変化(曲用)や動詞の語尾変化(活用)といった、一般に屈折と呼ばれる語形内部における一部要素の変化(通常は語尾変化)を通して文法的な機能を示そうとするものをいう。名詞の曲用であれば、主格、属格、与格、対格などの格変化が問題となり、動詞の活用であれば、1人称・2人称・3人称の人称変化や、単数、複数といった数の変化、場合によっては男性・女性といった性的変化などがある。屈折言語には古代ギリシア語、ラテン語といった死語とドイツ語やフランス語を始めとする西欧の主要な言語が挙げられる。英語については、出発点は、たしかに屈折言語であったが、文法情報の分析化が進み、今では、後述の孤

立言語に近い性格が濃くなっている。当時はまだ世界の僻地は遠く、言語調査の対象はメジャーなものに限られていたので、考慮された言語数は少なかった。しかし、屈折言語と孤立言語と膠着言語の区別は形態論的にいまだに有効である。たとえば、屈折言語のひとつである英語がラテン語やドイツ語と異なり、名詞の格変化や、動詞の人称変化をほとんど失って、孤立言語のひとつである中国語に近づいているという事実や、系統的には孤立した日本語が、名詞に助詞をつけることによって文法的な関係を示したり、動詞に助動詞を加えることによって機能的な関係を表したりする、トルコ語と同じように膠着言語に属する、といった点に言及するような場合に、その威力を発揮する。近代的な類型論は20世紀の後半になって誕生したもので、グリーンバーグの基本語順の研究がその嚆矢とされる。主語と述語動詞と直接目的語のあいだの語順や、名詞と付加形容詞のそれや、関係節が先行詞の前に付くか後に付くかなど、比較的、表面的な形式特徴を十数ヶ国語から千数百ヶ国語といった多数の言語で調査することによって、諸言語の類型化を行うものである。三省堂の『言語学大辞典』を見ればわかるように、昨今の世界の言語情報の充実ぶりには目をみはるものがある<sup>(4)</sup>。その種の発展を利用して、類型論は、近代的なものに取って代られた。正確なパターン化によって、言語とは何か、という古典的な命題（言語普遍）に解決の糸口を与えるとともに、特定の言語の客観的な認識を可能にした。18世紀にも、デカルト的な合理性を言語に与えようとした『一般理性文法』のような取り組みもあったが、時期尚早であった<sup>(5)</sup>。対照言語学は、20世紀の後半に生まれた新しい学問分野である。まず、それは、50年代にアメリカで発生し、60年代に発展する。ラドーの『諸文化を横切った言語学』が上梓されるのは1957年である。また、ヨーロッパでは、60年代から70年代にかけてドイツを中心として飛び火した。さらに、わが国では、70年代に初登場し、80年代から広がりを見せだす<sup>(6)</sup>。対照言語学は、新たな外国語の習得に際して、母語や慣れ親しんだ英語などの悪影響（干渉）をなくすために、系統に関係なく、いくつかの言語を細かく比較照合するもので、その類似点や相違点の指摘を外国語学習に活かそうという教育的で現実的な要請から生まれたものである。先の近代的な類型論では多数の言語の表面的な比較が問題となっていたが、対照言語学では、細かい分析が基本になるので、ふたつか、みつつといった、少数の言語のあいだでの比較検討が問題となる。

本稿は、レトリックの分野にこのような対照言語学の手法を取り入れようとする試みである。ふつうに、レトリックといわれるとき、それは広義においては、ギリシアで紀元前5世紀に始まり、19世紀末に一度、衰退し、20世紀の後半に復興した、西欧の古典修辞学を指す<sup>(7)</sup>。また、それは狭義においては、アリストテレス的な二分法のなかで、弁論術から詩法へと、話しことばから書きことばへと、論理学から表現法（措辞）へと移行した修辞法を指す。これに、古典的なレトリックと近代的なレトリックがあるとすれば、後者は命名に夢中になり病的に肥大化した部分をそぎ落として整理された修辞法ということになる。日本語にも、欧米のレトリックと重なる部分をもった文章表現法は存在しているが、それは、漢文や和歌の手法に端を発するもので、西欧のレトリックそのものは、一種の輸入品である<sup>(8)</sup>。それは江戸期に来日したキリスト教の伝道者たちを通して初めて紹介された。明治期に一度、本格的に導入されようとしたが、用語の難解さや、細かすぎる分類、曖昧で重複的な命名なども手伝って、結局、大正期には早くもほとんど忘れ去られた。五十嵐力の『新文章講話』は、その集大成とされる<sup>(9)</sup>。文章心理学で知られる波多野完治は30年代に早くも修辞学の復興を唱えるが、やはり時期尚早であった。わが国で、欧米的なレトリックが復活するのは、佐藤信夫の『レトリック感覚』と『レトリック認識』を通してであった<sup>(10)</sup>。佐藤は広告の表現法をまとめているうちに、西欧の古典修辞学の現代的な見直しを思いついたよ

うに思われる<sup>11)</sup>。だが、彼は、レトリックは普遍的なものだと先見的にみなしていたせいも、日本語の諸例と外国語の諸例を分けて考えることはなかった。90年代になっても、中村明が『日本語レトリックの体系』のなかで見せてくれたものは、先の五十嵐の著作の古くなった用例を刷新し、網羅的に日本語に関連する修辞法とその用例を集めたものであった。古典修辞学の現代的な整理は、佐藤の多数の著作を通して、ある程度なされている。しかし、古代ギリシア語やラテン語の修辞法が、英語やフランス語の修辞法と完全に重なるようには思えないし、ましてや、それらが日本語や中国語の表現法と等質であるとは思えない。したがって、それらの対照分析的な比較を通して、類似点と相違点を示すことによって、翻訳可能な修辞法と翻訳困難な修辞法ないしは翻訳不可能な修辞法とを分ける必要があった。たとえば、《頭韻》などのように、韻に関するものは、基本的に欧米語と中国語と日本語のあいだで、移し替えが困難である。他方で、《頭韻》といえ、筆者は、すでに、拙著『レトリックからコントラストへ』のなかで、ブルーストの散文に見られる、連続する、いくつかの語の語頭子音が同じであるような例を集めたことがあるが、そのときにも、果たして、これらは作者がわざと同じにしたものなのか、あるいはまったくの偶然が重なったものなのか、判然としなかった<sup>12)</sup>。そんなわけで、韻に関するものは韻文に限って修辞法と判断するほうがよいように思われる。また、《軛語》などのように、言語構造の違いが修辞の成立を妨げるものも存在している。対照レトリックでは、そのような問題に対応することが要求される。さらに、《直喩》の標識についても、日本語ではバリエーションが豊富であって、欧米の諸言語には見られない特色となっている。アメリカで《転喩》と呼ばれているものが、ヨーロッパでは《代換》と呼ばれる、など、対照レトリックの存在理由には事欠かない。

こうして、本稿では、英語の用例ないしはフランス語の用例を、日本語の用例と突きあわせることによって、日欧語間の修辞的な等質性と異質性とが論述される。その前に、現代日本語のポピュラーなレトリックについて、見ておこう。金田一春彦ほか編の『日本語百科大事典』のなかでは、修辞法は措辞と呼ばれ、現代日本語のレトリックは次のように下位区分されている<sup>13)</sup>。1) 比喩 「本来は当のものごとを表わすのでないことばに仮託して(つまり、たとえによって)、ものごとを表わす措辞」「覆された宝石箱のような朝」(西脇順三郎) 2) 擬人「人間でないものを人間になぞらえて表現する措辞」「石は1億万年を黙って暮らしつづけた。」(壺井繁治) 3) 引喩 「通常の引用は、他の文をその本来のありかたから離れないように提示する。これにたいして、その本来のありかたを故意に曲げて、いわば勝手に異なった文脈のなかに他の文を取り込む引用法を、とくに引喩という。」例は特に示さないが、出典の指示をせずに何かを引用することは、よくあるケースである。4) 対比 「異質な語句や文を照応させることによって、印象をきわだたせる措辞」「ひとよりもおくれて笑うわれの母、一本の樅の木に日があたる」(寺山修司) 5) 対句 「同一のタイプでありながら異なった句を対として並置する措辞」「街にみぞれが、人に涙が暗くさびしくこおらせる」(阿久悠) 6) 反復 「対句が似て非なる語句を並べるのに対して、反復は同一の語句を繰り返すものである。」「たっぴりと、春は、小さな川々まで、あふれている、あふれている」(山村慕鳥) 7) 倒置 「通常の順序を転倒させて文や文章を構成する措辞」「バカだな、おまえは」 8) 逆説 「自然らしさや常識にそった表現とは逆の表現をすることで、印象をきわだたせる措辞」「雲は、われわれに、最も近い」(高橋新吉) 読みやすさを考慮して、用例はすべて新カナ遣いに直してある。読点代りの一字分のスペース空けや、詩行としての改行も、ここでは煩を避けるためにできるだけ元に戻されている。それらは文体には関係するが、修辞法には関係しない。1) 比喩、2) 擬人、5) 対句、7) 倒置などは日本語の

表現手段としてポピュラーであろう。1) 比喩については、通常、《直喩》と《隱喩》か、あるいはそれらに《換喩》と《提喩》を加えたものを指すようである。実質的に《提喩》や「換喩は、固有名詞を除けばほとんどすべて死喩である」(池田177)の以上、ここでは、前二者が問題となっているのであろう。個々の技法については、後述する。2) 擬人も比喩の一種であろうが、ここでは、擬人だけ比喩から独立させている。3) 引喩と6) 反復は話しことばのなかにほとんど日常的にみられるものなので、かえって修辞法として学習しにくい部分がある。3) 引喩は、定義から、通常の引用ではなく、《暗示引用》allusionを指すものであろう。4) 対比は、5) 対句とイメージが重なりやすい。しかし、対句のかたちをとらない対比のスタイルがあるのは、対比の定義からもあきらかである。日本語にも、意識的に対比の手法を用いた例はあるが、他の日本語に親しい修辞法にくらべて表層的な形式がはっきりしない対比は、わが国では学習対象として一般化しなかった。8) 逆説は、本来の逆説を含むとともに、《撞着》のタイプも含む。

以上のわが国における一般的なレトリックの概念を考慮に入れながら、各論へと進もう。

英語では、as と like が一般的な《直喩》Simile, comparaison の標識となる。ステレオタイプの《直喩》については、すでに、日英語の例を比較分析した磯川治一氏の、『直喩と英語の文体』がある<sup>14)</sup>。同氏は、その第1章で「日本語特有の直喩」について語り、また第2章で「和英両語の俚諺的直喩の比較」について語っている。磯川氏はわが国における漢文の素養から離れた翻訳調の《直喩》の使用について、次のように述懐している。「時の吉田首相が、1950年、1月13日、記者団との会見で、保守合同をめぐる党内情勢を「コップの中の暴風雨のごときもの」と云った言葉を挙げる事ができる。英国の教養を身につけた吉田氏の口から、英語の諺、A storm in a teacup の直訳が極く自然に出てきて、「蝸牛角上の争」といわなかったところに、漢文的教養から西洋的、特に英米的教養へと推移しつつある日本の姿が縮図のように示される感じがする。」自国語のことわざは保守的なものだが、頻度の高いものは陳腐で、新鮮味に欠ける。そのとき、翻訳調の表現は、わが国では使い古されていないだけに、印象に残るだろう。こうして、磯川氏は、俚諺的直喩を日英両国語において比較するなかで語法の異同の一端を示している<sup>15)</sup>。look like a duck in a thunderstorm 「鳩が豆鉄砲を食ったよう」like a jewel on a dunghill 「掃溜に鶴」like mushrooms 「雨後の筍の如く」catch a weasel asleep 「生馬の目を抜く」like a flea on an elephant's back 「大木に蟬」as like as two peas (eggs) 「瓜二つ」as fickle as a weathercock 「猫の目のように気が変わる」as drunk as a fish etc. 「泥酔」sell like hot cakes, sell like fun 「飛ぶように売れる」as poor as a church mouse 「赤貧洗うが如し」like warming oneself by another's fire, 「人の褌で角力をとる」like fighting the windmill, like beating the air 「独り相撲」「のれんに腕押し」like splitting a hair 「重箱の隅をほじくる」like pouring water on a duck's back 「糠に釘」「馬の耳に念仏」「柳に風」等々 like casting pearls before swine 「猫に小判」「豚に真珠」like warming the snake in one's bosom 「飼犬に手をかまれる」like throwing a sprat to catch a whale etc. 「海老で鯛」like fishing in troubled waters 「漁夫の利」as different as chalk from cheese 「月とすっぽん」「雲泥の差」like the apple of one's eye 「眼に入れても痛くない」like kicking against the pricks 「ごまめの歯ぎしり」like clock-work, as regular as clock-work 「判で押したよう」like ploughing the field and forgetting the seed 「仏作って魂入れず」as cross as two sticks 「つむじを曲げる」ここでは、英語のステレオタイプの直喩とそれに対応する日本語の慣用句が並べられている。どちらも紋切り型の表現ではあるが、それぞれ自国の文化に根ざした比喩が選択されていて、興味深い。「I was limp as a dish rag.」(Ellison) 「私は皿洗いのぼろ布のようにくたくたになっていた。」(エリソン) limp は stiff の反意語である。それは第一義的には紙や布地がしわくちやになった状態を表

すが、ここでは比喩的に人がくたくたに疲れたさまを示す。和訳のほうも、「くたくた」と訳すことによって、人がくたくたに疲れているさまと、布きれが使い古されてくたくたに形がくずれたさまを、同時に示すことが可能になっている。つまり、ここでは、limpと「くたくた」が等しく両義的なものとして日英語間で、置き換えられている。“She would look for dark spots in his character and drill away at them as relentlessly as a dentist at a cavity.”(McCarthy)「彼女は虫歯の穴を探す歯医者のように容赦なく、彼の性格の暗部を探り出し掘り返そうとした。」(マッカーシー)英語で《直喩》の標識というと、次のものがある<sup>16)</sup>。1. like, as 2. seem, look, appear, resemble 3. such, so 4. -like, -y 5. a kind of, a sort of, something of この数は、網羅的なものでないが、それでも、日本語の比喩標識は英語のその比ではないように思われる。日本語では、中村が82種357個の比喩標識要素を抽出している<sup>17)</sup>。1. 感じる・たとえる, 比較する, 呼ぶ, なる, 感じられる, 気がする, 感じさせる, 見いだす, 思い合わされる, 想像される, 連想する, 似る, 相当する・類する, 劣る, 違う, 成す, 做う, 例にする, などの動詞類。2. まるで, いわば, ほとんど, まさに, つくづく, 今にも, つまり, なんだか, 仮に, これでは, まさか, 大して, 薬にしくも, Aを見ると, Bがよく...ように, Bということがある, Bではあるまいし, Cから見れば, Cで言えば, などの副詞類。3. ほど, でも, さえ, に, というものは, の, AであれBであれ, CがDならAはB, といった助詞類。4. 近い・同じ, 同様, 同然, 同類, その通り, わからない, ふさわしい, 比でない, よう, そう, である, ではない, Bはよかった, などの形容(動)詞・助動詞類。5. もの・こと, ようす・ぐあい, 感じ・気持ち, 代わり・役目, たぐい, 類似, たとえ, 錯覚, などの名詞類。6. へたな, 大した, いわゆる, 一種の, 小, といった連体詞・接頭辞類。7. ばり, 的, 化, 紛い, じみる, ぼい, そっくり, さながら, たる, そのもの, ひとつ, といった接尾辞類。日本語では、比喩標識の類義語が多すぎて、語調やリズムの上での選択の余地にありあまるものがある。これは長所でもあり短所でもある。日本の作家はこの恩恵にあずかっているわけだが、逆に言えば、それは特殊な《直喩》形式の抽出を困難にしている。つまり、欧米語の場合、われわれは、わかりやすい比喩標識の存在によって、比喩の第1項と第2項との間に表現の落差を設けることができるからである。

《隠喩》Metapher, métaphore は比喩標識をもたないので、喩えの箇所だけが示されていると唐突になりやすい。あるいは、その比喩の正当性を示すのに、十分な文脈を要する。その場合、《隠喩》は不在の隠喩と呼ばれて、《諷喩》その他の形式をとることが多くなる<sup>18)</sup>。だから、狭義における《隠喩》の多くは、喩えるものと喩えられるものが、同格的に結合されるか、ここでのように、ofなどの連結語で結び付けられるなどの形式をとる。“the rack of this tough world”「このつらい浮世という拷問台」(『リア王』)“Dead fish of a gentleman”「死んだ魚のような紳士」(D. H. ロレンス) ofで連結する《隠喩》の形式は英語に親しいものである。of自体に《直喩》の標識性はないので、英語の典型的な現前の隠喩タイプである。最初の例はともかく、第2例を直訳すると、「紳士の死んだ魚」になり、日本語として奇妙な表現になる。しかも、両者とも、「という」「のような」といった《直喩》の標識を補って訳さないと、日本語にならない。欧米語の《隠喩》の多くが日本語では《直喩》になることは、白水社の『レトリカ比喩表現辞典』のなかで、多彩な和訳文の比喩の多くが《直喩》であることを考えても、うなづけよう<sup>19)</sup>。英語圏の社会で《混喩》Mixed metaphorとも呼ばれる《組成隠喩》Synesthesia, synesthésie は異なった感覚領域に属する語を結合させる技法で、言語事象としては、一般に「共感覚」と呼ばれる<sup>20)</sup>。《混喩》は《隠喩》のなかでも人の意表を突くことの多い修辞法で、広告・コピーの世界では表現的な手段となる。次例のように

視覚と聴覚との組み合わせになることが多い。“Your ears will be all smiles.” 「あなたの耳はスマイル一色になるでしょう。」もともと頻繁に使える技法ではなく、言語を越えての使用は問題がないように思われる。しかし、《混喩》もやはり奇を衒ったものになるため、日本語の日常会話では使にくい。英語で《連喩》Continued metaphor と呼ばれているものは《諷喩》Allegory, allégorie に相当する。日本語でアレゴリーというと、寓意や寓話を指すので、日本語レトリックの世界では《諷喩》と呼ばれてきた。《諷喩》は、短い文脈のものでは下の諸例のように一文に収まる。長いものでは前後関係をよく把握することで正しい理解が可能となる。「私は自分の欠点の上に楼閣を築いた。しかしそれを築くのに心を労したので私の心は今なおその廃墟に埋まっている（スティーヴンソン）」「今までは霧の中にいた。霧が晴ればよいと思っていた。このことばで、霧が晴れた。めいりょうな女が出てきた。晴れたのがうらめしい気がする」（漱石『三四郎』）《諷喩》は、基本的に翻訳可能である。“Life is a foreign language: all men mispronounce it.” (Morley) 「人生は外国語だ。人はみな間違った言い方をする。」(モーリー) “We’ve got a tsunami of very new people who are sweeping out this town.” (Time) 「まったく新顔の連中が津波のように入り込んできて、この町 [= ワシントン] を押し流している。」(『タイム』)

《隱喩》が唐突で、日本語の散文や日常会話になじまない側面をもっていたように《換喩》Metonymy, métonymie や《提喩》Synecdoche, synecdoque のたぐいについても、日本語の表現のなかに定着しているものを除き、欧米語ほど使われない。わが国で唯一のレトリック辞典である野内良三氏の同名の著作（国書刊行会1998）を紐解いても、換喩・提喩・換称の各項目を埋めるのは、ほとんど成句・慣用句の例である。近い文脈で同じ語を繰り返さない、という文章作法は日本語にもあるのだろうが、欧米語ほど厳密に守られていないからである。たとえば、最初に「蟻」といって、次に「その黒い虫」といって、最後に「その小さな動物」というような置き換えの習慣は基本的に日本語にないのだ。“I have nothing to offer but blood (= sacrifice) toil (= devotion) tears (= sympathy) and sweat (= striving)” (W. Churchill) 「私は、血 (= 犠牲) と労 (= 献身) と涙 (= 共感) と汗 (= 尽力) 以外、何も提供できない。」(W. チャーチル) “Madeleine and the dignified visitor were talking about the Russian Church, Tikhoh Zadonsky, Dostoevski and Herzen.” (Bellow) 「マドレーンとその貴禄十分な訪問客はロシア教会、チコー・ザドンスキー、ドストエフスキーとヘルツェンについて語っていた。」固有名詞の代りに普通名詞を使ったり、普通名詞の代りに固有名詞を使ったりするタイプの修辞法を《換称》Antonomasia, antonomase と呼ぶ。なお、中村が《代称》の例として挙げている「また殺しっこが出来る様にすんべと言ってる衆 [= 憲法改正論者]」（井上ひさし）や「父の女房殿 [= 義母]」（小林一茶）は、それが人に関わるものだけに、《換称》のなかに組み入れる必要がある。「古代英詩で行われた kenning (代称) は人ではなく物に対して用いられる antonomasia (換称) と言うことができる。Kenning 自体は化石化した現象だが night’s candles (= stars) / the traveling lamp (= the moon) などの独創的メタファも kenning の一種と見なすとすれば、これは現代詩でも重要な技法となる。』<sup>20</sup> 同じことは散文についても言えるだろう。「この地球上で最大の容器 [= 海]」（中沢けい）本来、《代称》Kenning は詩的な気取り趣味の存在を感じさせずにはおかない。「女性にしかない器官 [= 子宮]」（井上ひさし）現代の日本語散文におけるその存在理由は、直接言うことがはばかられるような語句について、その婉曲表現化にあるかもしれない。《代称》は散文の世界では先のメタレプシスと同一視してよいように思われる。この種の例としては、「ふたりの問答をうしろのほうで冷淡に聞いていた須永は、かぎならばくが持ってきているよ、と、冷たい重いものをたもとから出して、おばに渡した」（漱石

『彼岸過迄』)「一週間ののち、ふたりの血を分けた情けのかたまり[ = 流産した胎児 ]は、ついに冷たくなった」(漱石『門』)「昔、ギリシャにイスキラスという作家があったそうだ。この男は、学者、作家に共通なる頭を有していたという。わがはいのいわゆる学者、作家に共通なる頭とは、はげという意味である。」(漱石『吾輩は猫である』)などがある。これらは、『美化法』・『婉曲語法』や『提喩』にも関係するにちがいない。〈*Le fer mieux employé cultivera la terre*〉(Malherbe)「鉄はもっと上手に使えば土地を耕すことができるだろう。」(マレルブ) 剣や銃などの武器をつくるのに使われる鉄が、鋤や鍬といった農耕器具をつくることができるということを、端的に表現するのに、「鉄」という一般的な語を利用している。過去に故佐藤信夫氏が国際的な修辞学会に古典修辞学における提喩の概念の修正(全体と部分との間の代替は『換喩』とするもの)を提案して受け入れられたことがあり、現在は、もっぱら一般と特殊との間の置き換え、特に雪や白髪を白いものというように、特殊なものを一般的な表現で示そうとするものをいう<sup>22</sup>。グループμのようにすべての修辞法の根幹に『提喩』の変換をみる研究者たちもいた。それほど、『提喩』は古典修辞学のなかでは重要なレトリックのひとつなのだが、なぜか、日本語では『直喩』ほどポピュラーにはならない。不在の『隠喩』といっしょで、比較の第1項や比喩標識を含まないものは、唐突で理解しにくいからだろうか。“The ploughman plods his weary way.” (T. Gray)「農夫が疲れた道をとぼとぼ歩く。」(T. グレー)『代換』hypallage 〈*ce marchand accoudé sur son comptoir avide*〉(V. Hugo)「貪欲なカウンターの上にひじを突いたあの商人」(V. ユゴー)「広義の代換は、のちに『形容語転移 (transferred epithet)』と呼ばれることになるあやをも含む。」<sup>23</sup>日本語で『換喩』というとき、少なくともふたつの用法があることに注意する必要がある。一方で、佐藤信夫の『レトリック認識』(講談社1981)でも、先の野内良三氏の『レトリック辞典』でも、『換喩』は西欧の古典修辞学における metalepsis の訳語になっており、側写法の意識的な別称が示すように、ある事柄を別な角度から描写をする修辞法を意味する。他方で、英語系の修辞法の包括的な手引書である池田拓朗氏の『英語文体論』(研究社出版1992)では『換喩』は transferred epithet (転移された付加形容詞)の訳語となっていて、本来修飾すべきでない位置に非論理的に形容語を移す技法を示している。ところが、この意味では、伝統的な修辞学には、『代換』という修辞法が登録されていて、メタレプシスとこの代換法とはまったく概念が異なるものなので注意がいる。訳語で対応させることには危険があるのだ。

『軛語』Zeugma, zeugme とは「文の一部で語や語群を繰り返さずにおく構文。それらの語や語群は、同一もしくは似た形ですぐ隣りあった節において示されているものであり、この節がないと当の不完全な部分は理解不可能となる。」<sup>24</sup>「『軛語』[軛も頸木も当て字である。くびきは本来『車の轆(ながえ)の先につけ、牛馬のくびにあてる横木』を意味する。]と呼ばれる表現技法は、特殊な効果を狙って、その種の誤りを意図的に起こす技術である。カテゴリーの違う異質な複数の語を無理に同じ一つの動詞や形容詞で受ける、という言語操作で矛盾感を引き起こし、摩擦を生じさせる。」<sup>25</sup>中村は、この『軛語』を「摩擦」の章に組み入れている。その関係で、定義の後半はその矛盾性に引き寄せた定義づけになっているように思われる。しかし、形式的な特性から判断すると、この技法は摩擦というより、省略に特徴のあるものである。実際、『一般修辞学』は『軛語法』を「省略法の変種」<sup>26</sup>とみている。欧米語の文章作法においては、同一文中で、おなじ語をくり返すことを嫌うということがある。その習慣が、『兼用』や『軛語』を育てているのであって、なによりも、それは省略法なのである。『軛語』とは「ふたつの語法上相容れない語句をひとつの語で無理に結びつけた表現をいう。学生の英作文に見受けられる誤用だが、最近のジャー

ナリズム英語で使われ出している。<sup>27</sup> “Her hair is red, her eyes blue.” 「彼女の髪の色は赤く、目の色は青い。」内容的には、なんの変哲もない文だが、コンピュータである be 動詞が後半の要素では省略されていて、そのために、平行性が損なわれている。《軛語》の効果は、動詞の省略が二回にわたるとき、大きなものとなる。«Les noms reprennent leur ancienne signification, les êtres leur ancien visage ; nous notre âme d'alors» (M. Proust) 「名前は昔の意味を、人々は昔の顔を、我々は当時の魂をとり戻す(M. プルースト)» Dans cette pièce, chaque génération, en se retirant, comme une marée ses coquillages, avait laissé des albums, des coffrets, des daguerréotypes. » (F. Mauriac) 「この部屋のなかでは、どの世代も、出ていくときに、まるで潮流が貝殻を〔残していくように〕アルバムを、箱を、銀板写真を残していった。」(F. モーリアック) 定義も用例も初出はフランス語シンタクスの大家であるロベール・ル・ピドワからのものである。日本語の訳文のレベルでは、《軛語法》は成立しないように思われる。なぜなら、上の諸例において、省略された動詞、「とり戻す」 reprendre と「残していく」laisser を補って訳さなければ、日本語としてわかりにくい文になるからである。《兼用》Syllepsis, syllepse とは「本来ふたつの動詞・形容詞または副詞などで表すべきところを、ひとつの語ですませてしまう技法をいう。掛詞の一種でユーモアの効果を出しうる。Time, Newsweek でよく見かけられる。」<sup>28</sup> 『日本語レトリックの体系』のなかにも、《兼用》の項目はあって、英語でよく引用される例が示されている。“He lost his hat and his temper.” 「彼は帽子をなくして腹を立てた。」この技法とその効果は通常の和訳には現れない。ここでも、単語の多義性は恣意的であり、日欧間でひとつの語の意味範囲が完全に一致することはないからである。「彼は帽子と理性をなくした」と訳せば、ある程度、原文の修辭的な意図は訳文でも伝わるだろう。しかし、それは日本語としては不自然である。ここで中村の挙げている「今朝は時間がなくて牛乳と卵を食べただけだ」にしても、「車や飛行機の飛ぶ便利な世の中になった」にしても、実は、《軛語》の体をなしていないように思われる。さらには、『みんなの文章教室』(別冊宝島 JICC 出版局1983)のなかで、野田秀樹の文体特性とされている《軛語》の例のすべてが、実際は、《兼用》に組み入れたほうがよいように思われる。「身も心も素顔も男女関係も乱れてる」「モデルに不必要な贅肉と教養をそぎおとしたからよ」「古井戸の中に家財道具と一緒に真心もおとしたんだ」(『少年狩り』)など。中村自身も、あとで、「野田秀樹の例のうち、具体的な意味と抽象的な意味とがともに慣用化された組み合わせから成るものは、むしろこの技法の性格をおびているとも言えるだろう」と述懐している。つまり、中村にあっては、《兼用》と《軛語》は、ほとんど同一のものとしてとらえられている。前者は掛詞の一種としてとらえることも可能だが、後者は掛詞の性質を帯びることはないように思われる。『英語文体論』のなかでも《兼用》(Syllepsis)と《軛語》(Zeugma)は一括りにして語られている。ワンセットで語られているからといって、それらをほとんど同じものとして考えることには危険がある。《兼用》は野田秀樹の文体特性とされたりするだけに、日本語でも十分に効果を発揮することができる。欧米語との統語構造の違いから、省略される元の動詞などが、たとえば、その目的語よりも前にくる欧米語に対して、日本語では後にくるだけである。キーワードが前にくるのと後にくるのとでは何が違うのだろう。欧米語では、問題の要素にもういちど注意が注がれるが、日本語では、後の要素が浮き彫りにされる<sup>29</sup>。この《兼用》と《軛語》も、《転喻》と《代換》のように、混同されやすい。同じように述語動詞が省略されるかたちをとることが多いのだが、それらの違いを説明すると、《兼用》の基本形式は、レベルの異なるふたつ以上の主語や目的語(一方は原義的に、他方は派生的に使われる)をひとつの動詞で兼用させるものであり、それに対して、《軛語》の場合は、同一文中で SVO の構文が続くときに、二つ目以降の節の述語動



詞を省略するもので、S1VO1, S2O2, S3O3のように、後半は語の列挙のような様相を帯びる。なお、基本語順の違いなどの関係で、《軼語》は日本語の構文にはなじみにくいものがあるが、野田秀樹のように《兼用》を得意とする日本の作家はいても、《軼語》の日本語の用例は見つからない。そこで、訳ではわかりにくいかもしれないが、以下に欧米の例を示そう。「スカートをはいているのがご主人で、半ズボン [をはいているの] が奥さん」「社交界の人間がポーズとかしつけの悪さと呼ぶ、官憲が反抗の精神と [呼ぶ]、隣人が狂気と [呼ぶ]、家族が利己主義とか傲慢と [呼ぶ]、あの野人の性格」「それは船員が海についてもっている、猟師が狩の鳥獣について [もっている]、医師でなくてもしばしば病人が病気について [もっている] その種の知識のようなもの」「兵士は戦死するまでに、泥棒はつかまるまでに、また一般の人は死ぬまでに、まだ無限の猶予期間があたえられていると思ひこむ」(以上、プルースト『失われた時を求めて』)

“Frailty, thy name is woman!” (W. Shakespeare)「か弱き者よ、汝の名は女なり。」(W. シェイクスピア) in dark squares the poems gather like conspirators. (D. Walcott)「暗い広場で私たちの詩は謀反人たちのように集まる。(D. ウォルコット)《擬人》Personnification, prosopopée は日本語のレトリックでも古くから認められていたように、普遍的な修辞法である。それに対して、《擬物》は、《擬人》の一種で、それとは逆に人を物に喩えるタイプの日本独特の命名である。人を示す《換称》と物を示す《代称》を区別するのであれば、《擬人》と《擬物》を区別してもよさそうである。実際、日本でも、欧米でも、成立可能である。次の諸例では前者が《直喩》タイプで後者は《隱喩》タイプである。「いい舟があんだが」と老人は二百メートルも向うにあるひねこびた松の木にでも話しかけるような、大きな声でどなりたてた」(山本周五郎『青べか物語』)「そのあたりは夏になると一本のはしばみの木の青葉におおわれ、その陰にむぎわら帽子をかぶったひとりの釣師がいつもはやくから根を生やしていた」(プルースト『失われた時を求めて』)

物事の裏面の真実を強く訴えようとする、「幸せな不幸」「臆病な勇者」のような正反対の意味の語句を突き合わせた表現を使いたくなる。それが《撞着》Oxymoron, oxymora である。シェイクスピアが得意とした。それ自体印象性の高いものではあるが、前後関係の説明がないとわかりにくいことも多い。これも、「生ける屍」や「急がば回れ」のような慣用句を除き、日本語の日常会話には取り入れにくい側面をもっている。物事の二面性や多面性を主張する作家の著述については、その限りでない。“I must be cruel only to be kind.” (Hamlet)「僕は親切であるためにこそ残酷にしなくてはならない。(『ハムレット』)“Fairest Cordelia, that art most rich, being poor; / Most choice, forsaken; and most lov'd, despis'd!” (Lear)「美しいコーデリアさん、あなたは持参金を失われてももっとも豊かになり、父上に見捨てられてももっとも望ましく、軽蔑されてももっとも愛されるのです。」(『リア王』)井上ひさしは、初期のユーモア小説『青葉繁れる』のなかで、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の有名な一節「ああ争う恋、ああ恋しての憎しみ、ああ無から生じた有、ああ重い軽はずみ、真剣な戯れ、美しい姿の醜い取り乱し、鉛の羽根、輝く煙、冷たい火、病める健康、いつも覚めているほんものでない眠り」をパロディーにして、「理知的なジュリエットなんて、炊きたての冷飯、痩せぎすの肥っちょ、見上げるような小男、前途洋々の老人、抜群の不成績、一匹狼の大群、何千何万という四十七士、傾国の醜女、不親切な人情家みたいなものだ」というナンセンスな一文をつくっていた。シェイクスピアの《撞着》には、いちいち意味があるように思われるが、井上の《撞着》は、あきらかに、ユーモラスな全体効果をねらったものであるにちがいない。つまり、井上のものは、表現の《積み重ね》に主眼を置いた文章だということだ。

“I imagined I heard the fall of snow upon snow.” (Ellison)「私には雪の上に降り積もる雪の音が聞こえるような気がした。」(エリソン)“They were so long that had I been wearing a hat, it would infallibly have been knocked off.” (Warner)「映画スターがつけていた睫毛はすごく長くて、私が帽子をかぶっていたら、その睫毛で間違いなくつき飛ばされていただろう。」(ワーナー)“or else my project fails, / Which was to please.” (Tempest)「さもなくば私のプロジェクトも失敗に帰します、それはみなさんに喜んでいただくだけのことなのですが。(『嵐』)“Travelers walk a few steps from a train to a boat and are off.” (Time)「旅行者は列車から降りて2, 3歩あるき連絡船に乗って出かける。」(『タイム』)おそらく、「ピラミッドのように巨大な鼻」(ブルースト)のようなばかげた《誇張》にみえるものよりも、「みっともなくはない鼻」(ブルースト)のように控えめ(《緩叙》)にみえるもののほうが、日本人好みであろう。しかし、まちがいに、《誇張》Hyperbole, hyperboleと《緩叙》Litotes, litoteは根がいっしょであり、裏腹のものである。「カンブルメール氏の鼻はみっともなくはなかった、むしろその大きさのために、りっぱすぎ、たくますぎ、いばりすぎている」(ブルースト『失われた時を求めて』)

« Le passé me tourmente et je crains l’avenir. » (Corneille)「過去が私を苦しめ 私は未来を恐れる。」(コルネイユ)平行性を嫌い、文に変化を付与するための《交差》Chiasmus, chiasmeの使用は日本語の文章にも時々見られるものである。「ヘンリーは哲学のような小説を書き、ウィリアムは小説のような哲学を書く」(漱石「思い出す事など」)「現在のような転形期には 職能に徹し切れない、中途半端な存在が、芸術家のような政治家や、政治家のような芸術家が、あまりにも多すぎるようである」(花田清輝『さちゆりこん』)

「並列構造で、意味が対照的または対立的なものを《対比》と呼ぶ。対照表現は人間の思考上本質的なもので、今日でも多く見られ、抽象化と一般化の表現形式であり、アイロニの一形式にもなる。」<sup>31</sup>《対比》Antithesis, antithèseは《対句》と異なり、構文の平行性をその特色とするのではなく、あくまでも意味の対照的な語句を並べることにある。移し変えは可能だが、ここでも、穏やかな《対句》表現になじんできた日本人にとって《対比》は扱いにくい存在なのかもしれない。“I am slight, my brother is gross. He’s incoherent but vocal; I’m articulate and mute.” (Barth)「ぼくはやせてるが、兄貴は太っている。兄貴は論理的でないが、声は大きい、ぼくは言語明晰だが黙っている。(『バース』)“Not that Love Story was so good in any way. It is simply that the sequel is so wretched in every way.” (Time)「『ラブ・ストーリー』がおよそ良いということではない どの点からも。続編がおよそひどいというだけのことなのだ あらゆる点で。」(『タイム』)«Vaincre à Austerlitz, c’est grand ; prendre la Bastille, c’est immense» (V. Hugo)「オステルリッツでの勝利は偉大だが、バスチャーユの攻略は巨大だ。」(V. ユゴー)

“...but we glory in tribulations also: knowing that tribulation worketh patience; And patience, experience; and experience, hope.” (Romans)「だが私たちはまた苦難をも喜ぶ、それは苦難が忍耐を生み、忍耐が練達を生み、練達が希望を生むことを知っているからである。」(『何ですか』と男は二の句を継いだ。継がねば折角の呼吸が合わぬ。呼吸が合わねば不安である」(夏目漱石『虞美人草』)われわれは、漱石が特に『草枕』のなかで、この《前辞反復》Anadiplosis, anadiploseを好んで使っていることを知っている<sup>32</sup>。日本語の例が多数存在するものについては、それだけで、日本語への置き換えやすさを物語っているといえよう。

“I poured her a stiff one, and she poured me her story.” (Time)「私は彼女に強い酒を注いでやると、彼女は私に自分の話をし出した。(『タイム』誌)«Le coeur a ses raisons que la raison ne connaît point.»

(Pascal)「心は理性のまったく知らない、それ自身の理由をもっている。」(パスカル)«Sans être une jolie femme elle était joliment femme.»「美人ではなかったが、彼女はすばらしく女しかった。」《異義復言》Antanaclasis, antanaclase は同一文中で意味を変えて同じ語を繰り返す修辭法で言葉遊び的な色彩の濃いものである。言葉遊びに見えることから、古来、控えめに使うことが要求されてきた。「異義復言は苦心のあとをとどめるものであるから控え目に用いなければならない。これは思考の表現に、それを心に刻みつけるための優雅な、気のきいた、あるいは力強い言いまわしを与えるという条件においてのみ許容されるべきものである。」<sup>33</sup>上の諸例を見ればわかるように、《異義復言》は基本的に他の言語に移し替え困難である。日本語で似たような言葉遊びは可能でも、言語の恣意性の観点から、多義性の範囲は言語ごとにまちまちであるからだ。日本語と欧米語とは系統がすっかり異なるだけに、なおさらひとつの語が言語の垣根を越えて同じふたつの意味をもつ可能性は低い。他の似たような言葉遊びでは表現できることから、翻訳家は別種の言葉遊びに置き換えて表現することが多い。

«Je ne vous peindrai point le tumulte et les cris, / Le sang de tous côtés ruisselant dans Paris ; / Le fils assassiné sur le corps de son père, / Le frère avec la soeur, la fille avec la mère ; / Les époux expirants sous leurs toits embrasés ; / Les enfants au berceau sur la pierre écrasés.» (Voltaire, *Henriade*)「私はあなたに、喧噪や叫喚、パリの至るところで流された血については述べないことにします。父の亡骸の上に折り重なる殺された息子、兄と弟、娘と母親。燃える屋根の下の瀕死の夫と妻、瓦礫の上の押し潰された乳飲み子たち。(ヴォルテール、『アンリアード』)」「ここから先はどうしても申しあげられません。お嬢様を妾に出せなどという馬鹿げた話をどうして口にできましょうか。」(井上ひさし)佐藤信夫と親交を結んでいたころの井上ひさしは欧米風のレトリックの習得を目指していたので、ここでも、あきらかに《暗示看過》prétériton(井上自身は《暗示引用》と呼ぶ)の実践として本例があると考えられる。古典修辭学の特殊な修辭法でも、このように、日本語の習作があるものについては、それが翻訳可能であることを示している。ただ、欧米語では基本的にSVOの語順をとるのに対して、日本語ではSOVであるため、後者において、この修辭法を実践すると、倒置の効果が加わる点を指摘しておかねばならない。

ここですべての修辭法に触れる余裕はない。そろそろまとめにかかろう。本稿の役割は、個々の修辭法の日欧語間での異同を証明することにあるのではなく、その概略を示すことにある。まず《直喩》と《隱喩》について。欧米語が《隱喩》を好むのに対して、日本語は相対的に《直喩》になじむ傾向がある。換言すれば、日本語は標識で比喩を理解しようとする言語である。《隱喩》は唐突で、日本語の散文や日常会話になじまない側面をもっている。《換喩》や《提喩》のたぐいについても、日本語の表現のなかに定着しているものを除き、欧米語ほど使われない。《転喩》と《代換》については、用語の使い方が日欧間であるいはアメリカとヨーロッパの間でも異なっているため、注意を要する。《転語》と《兼用》については、基本語順の違いなどの関係で、《転語》は日本語の構文にはなじみにくいものがあるが、野田秀樹のように《兼用》を得意とする日本の作家はいても、《転語》の日本語の用例は見つからない。逆に《兼用》は日本語でも十分に効果を発揮することができる。欧米語との統語構造の違いから、省略される元の動詞などが、たとえば、その目的語よりも前にくる欧米語に対して、日本語では後にくるだけである。欧米語では、問題の要素にもういちど注意が注がれるが、日本語では、後の要素が浮き彫りにされる。《擬物は》《擬人》の一種で、《擬人》とは逆に人を物に喩えるタイプの日本独特の命名である。実際、日本でも、欧米でも、成立可能であるが、これまで、欧米では、《擬人》と《擬物》を区別してこなかった。

《誇張》と《緩叙》については、日本語の観点に立つと、わざとらしい《誇張》より、もってまわった《緩叙》が適合しているように思われる。しかし、《緩叙》も《誇張》の一種であることに注意する必要がある。《頭韻》が言語を越えて移し替え困難であったように、《異義復言》などの掛詞も基本的に他の言語に翻訳しにくい。無理に置き換えをしようとする、別の修辞法になってしまう点に注意されたい。《対句》と《対比》については、それらは似て非なるものである。奇を衒うことを望まない日本語では、《対句》的な表現の平行性は好まれるが、《対比》的な表現のコントラストは避けられる傾向にある。《撞着》や《暗示看過》なども、もともと慣用句を除き、日本語にはなじまないもので、井上ひさしのように欧米の古典修辞学をしっかりと学ぼうとした作家たちが試験的に使ってはみたが、わざとらしさは否めない。それに対して、《交差》や《前辞反復》などの修辞法は、言語の制約を超えて無理なく使えるように思われる。

## 註

- (1) 比較言語学は Comparative Linguistics であるのに対して、対照言語学は Contrastive Linguistics である。対照言語学の代りに比較言語学といってしまうと、この19世紀に発達した実証主義の学問分野と混同される恐れがある。
- (2) 言語学の世界では、しばしば、ヘルマン・パウルの『言語史原理』は19世紀的な学問の総決算として旧約聖書にたとえられ、フェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』は新約聖書にたとえられる。
- (3) 「抱合言語」という、一文がひとつの単語のように切れ目なくつながったタイプの言語を区別する場合もあるが、ここでは、有効性の観点から、抱合言語は考慮されていない。
- (4) 亀井 孝・河野六郎・千野栄一氏編『言語学大辞典』（全6巻+別巻1）三省堂1988 2001を参照されたい。そこには、日本の印刷技術の粋を集めて、3000言語以上の日本語による記述説明が見られる。
- (5) ちなみに、18世紀の一般文法の演繹的な立場を継承したのが、あのノーム・チョムスキーであり、彼の『文法理論の諸相』は、その与えた影響の大きさからいってソシュールの『講義』にも匹敵するものとされる。
- (6) 対照言語学の領域では、その性質上断片的な研究が多いが、まとまったものとしてはヨーロッパの諸言語や朝鮮語と比較した国語研究所の業績が知られている。
- (7) 古典修辞学は西欧では19世紀までは高等学校の授業のなかで国語そのもののような価値を付与されていた。1889年にフランスでこれまで修辞学級と呼んでいたリセー文系最終学年（高校3年時相当）が単に第1学年と呼ばれるようになったことが、修辞学の衰退を象徴する出来事として登録されている。
- (8) 西洋古典修辞学のが国への導入と挫折の歴史については、速水博司の『近代日本修辞学史：西洋修辞学の導入から挫折まで』（有朋堂1988）を参照されたい。なお、同書は1995年に『レトリックの歴史：近代日本』に発展している。
- (9) 五十嵐力『新文章講話』早稲田大学出版部1909（明42）。この五十嵐の著作の用例を刷新し、重複を厭わず拡大解釈して、片端から国内外の修辞法を収録していったものが中村明の『日本語レトリックの体系』（岩波書店1991）である。他に坪内逍遙・島村抱月・波多野完治などレトリック研究の伝統は早稲田にある。
- (10) 佐藤信夫『レトリック感覚』（1978）『レトリック認識』（1981）講談社。
- (11) 高部伸夫（佐藤信夫）『広告コピーのレトリック』東洋経済新報社 1966。
- (12) 拙著『レトリックからコントラストへ ブルーストの文章にみる対比の諸相』（駿河台出版社 1980）の「頭韻」の章を参照されたい。
- (13) 金田一春彦ほか編『日本語百科大事典』大修館書店 1988。
- (14) 磯川治一『直喩と英語の文体』篠崎書林 1956。
- (15) 日欧語間のことわざの比較については、拙稿「日英仏語の諺における対照分析」（『岐阜聖徳学園大学紀要』第43集2004. 2）を参照されたい。そこでは、日欧語間で完全に対応するものから、それぞれの文化の違いにもとづく三者三様の表現まで、類似点と相違点が示されている。
- (16) 池田拓朗、『英語文体論』（研究社出版 1992）、166 73ページ。

- (17) 中村明 『比喻表現の理論と分類』(秀英出版 1977), 448-452ページ。
- (18) 《隠喩》には、比較の第2項だけが文中に現れる不在の隠喩と、第1項・第2項ともにそろっている現前の隠喩がある。現前の隠喩は標識がないだけで《直喩》に近い。
- (19) 榛谷泰明 『レトリカ比喻表現辞典』白水社 1988(第2版 1994)を参照。
- (20) 《組成隠喩》という訳語は自由な合成能力をもつドイツ語修辭法での呼称である。
- (21) 池田拓朗, 前掲書, 216ページ。
- (22) たとえば、帆船をその象徴である帆で表現することは、長らく、《提喩》の例だとされてきたが、実際は、帆は帆船の主要ではあるが一部であり、隣接の関係にあることから《換喩》のはずである。
- (23) 佐藤信夫 『レトリックの消息』(白水社 1987), 73ページ。
- (24) グループμ 『一般レトリック』(大修館書店 1981), 134ページ。
- (25) 中村明 『日本語レトリックの体系』岩波書店, 357ページ。
- (26) グループμ, 前掲書, 134ページ。
- (27) 池田拓朗, 前掲書, 193ページ。
- (28) グループμ, 同書。
- (29) 池田拓朗, 前掲書, 193ページ。
- (30) 拙著 『レトリックからコントラストへ』(駿河台出版社 1980)の「兼用」の章を参照。
- (31) 池田拓朗, 前掲書, 226ページ。
- (32) 拙著 『漱石のレトリック』(アーキテクト 2001)を参照。
- (33) P.ギロー 『言葉遊び』(白水社 1979), 27ページ。